

# 郷土博物館・文学館だより



2月6日に実施された展示解説風景

現在、当館では3月22日（月・祝）まで特別展「渋谷の富士講 ー富士への祈りー」を開催しています。



江戸時代の神殿

## 特別展

## 「渋谷の富士講

## ー 富士への祈り ー」開催中

今回の特別展は、渋谷で広く信仰されていた富士講についての展示です。富士講とは、富士山を神として信仰する人の団体をいいます。この富士講は江戸時代、江戸八百八講といわれる程多く組織されました。特に渋谷道玄坂には、富士講の祖といわれる食<sup>じき</sup>行<sup>ぎょう</sup>身<sup>み</sup>禄<sup>ろく</sup>の弟子が住んでおり、江戸随一といわれる講社がありました。今回の展示では、その講社の貴重な資料を中心に、広尾・恵比寿・代々木・千駄ヶ谷など、区内の富士講について、祭事具や装束など、初公開資料を多数展示しています。



展示室風景

## ビルの谷間に古墳時代の住居 — 円山町遺跡 —

渋谷駅のハチ公口を出て道玄坂方面に進み、坂を上っていくと右側に交番があります。この付近は円山町と呼ばれているところで、大正から昭和にかけて花街としてにぎわいました。いまでは、道玄坂の通り沿いにはビルが林立し、オフィス街へと変わってきています。

このようなビルとビルにはさまれた場所が、円山町遺跡です。平成 18 年（2005）に円山町 19 番地で発掘調査が行われ、旧石器時代から古墳時代まで、この場所で暮らした人たちの生活の跡や道具類が出土しました。

円山町遺跡は、今から約 50 年前の昭和 36 年（1961）、今回調査を実施した場所のすぐとなりで、個人宅を建築する際に初めて確認されました。その時には古墳時代の一軒の竪穴住居跡と、壺、器台、高坏などの土器が発見されています。しかしそれ以降、周辺では遺跡の発掘調査がなされず、やがて平成 17 年になって、この場所で再開発の計画が浮上したため、18 年に本格的な発掘調査が実施されました。

発掘により古墳時代の住居が一軒確認されています。一部近世の溝で壊されていましたが、四隅が丸い形をした（隅方方形）住居です。当時の人たちが暮らした住居の床面に、焼けた木材（炭化材）や焼けた土が確認されたため、火事にあった住居（焼失住居）と考えられています。土器も住居内から出土し、土師器（はじき）の壺、台付甕（だいづきがめ）、器台などが見つかりました。また住居内の焼土と炭化材を分析したところ、焼土からはぶどう科の種が確認され、炭化材もクヌギであることがわかりました。

年代測定（AMS 炭素 14 年代測定）をしたところ、今から約 1,750 年ぐらい前のものであることが判明しました。

このほかにも、縄文時代のピット（穴）群や遺物も見つかっています。遺物は縄文土器で、今から約 5,000 年ぐらい前の土器片が出土しました。

また旧石器時代の遺物も発見されました。約 18,000 年ぐらい前のもので、黒曜石製のナイフ形石器や石器をつくるためのチャート製の剥片（はくへん）が出土しています。さらには調理に使用したのでしょうか。焼けて赤くなった礫（れき）も見つかりました。

調査をした場所は、井の頭線の神泉駅から直線距離で、約 250m のところに立地しています。神泉というところは湧き水がでていたところで、そこからの流れは宇田川に合流し、やがて渋谷川へと流れていきました。そのため旧石器人をはじめ、ここに住んだ昔の人たちには、生活に必要な水がすぐ近くで得られる格好の場所であったようです。



古墳時代住居跡内出土遺物



## 『週間新潮』の叙情画家・谷内六郎

谷内六郎は、昭和31年(1956)2月の『週刊新潮』創刊から、昭和56年1月23日に亡くなるまで、同誌の表紙を描き続けました。1,300枚以上にのぼるこの表紙絵は、『週刊新潮』の顔であり続けたとも言えるでしょう。

谷内は、大正10年(1921)12月2日、豊多摩郡渋谷町大字下渋谷伊達跡(現在の恵比寿3丁目)で誕生しました。父は東京高等獣医学校(現在の日本大学生物資源科学部)の寄宿舍を営み、母は寄宿生たちの食事を作りながら、9人の子どもたちを育てました。谷内は六男で、喘息(ぜんそく)に悩まされる病弱な少年でしたが、絵を描くことが何より好きだったといいます。

闘病に明け暮れる中、作品が『VAN』編集長の伊藤逸平に認められ、昭和30年6月には、第1回「文藝春秋漫画賞」を見事受賞します。それまで無名であった谷内六郎の名は広く知られるようになり、この受賞がきっかけとなって『週間新潮』表紙絵の連載が始まります。

谷内の絵には、幼い子どもが頻繁に登場します。谷内は、こうした子どもの持つ夢や不安などの心情を、風景の中に投影する手法で、独自の世界を創造しました。読者の多くは、記憶の底に沈んだ自らの体験を呼び起こされる谷内の作品に魅了されました。横尾忠則は「日本人なら誰でも谷内さんを自分の中にかかえているのではないのでしょうか—中略—谷内さんの絵は谷内さんの日記であり自伝ですが、これがまたぼくの日記でもあり自伝でもあるのです。(『谷内六郎

の絵本歳時記』新潮社 昭和57年)」と述べています。井上ひさしは、谷内の叙情世界は「案の捻出という知の作業の上に成立していた」とし、さらに「谷内六郎は見立て好きの日本人の胸をすばりと得たのだと思う—中略—現存の人物を動物や歴史上の人物になぞらえるやり方は開拓しつくされていたが、谷内六郎のように、幼い日の自分の玩具箱からなぞらえるものを見つけてきた人はいなかった。(『谷内六郎の世界』新潮社 昭和56年)」と評しています。

昭和33年、谷内は笹塚駅前の歯科医師の五女で、劇作家の飯沢匡に師事し、「トッパンの人形絵本シリーズ」などで活躍していた創作人形作家・達子(みちこ)夫人と結婚します。後年、夫人は「出会った頃や新婚当時のことを描いた絵は、やはり思い出深いものです。《名曲の店》

(『週間新潮』昭和31年3月11日号の表紙)はよく行っていた渋谷の喫茶店「田園」を描いたもの。」と語っています(『谷内六郎 昭和の思い出』新潮社 平成18年)。



モザイク壁画になった谷内六郎の絵(青山・山陽堂書店)



## 収蔵資料紹介

### 『江戸名所図会』

本体 タテ 25.6cm  
ヨコ 18.4cm

『江戸名所図会』は、江戸神田雉子町の名主であった斎藤家の幸雄・幸孝・幸成の三代によって編集された地誌で、天保五・七年（一八三四・六）に刊行されました。七巻二十冊の大部のもので、江戸周辺の広い地域が、実地調査に基づいて詳しく記述されています。

ところで、本書は長谷川雪旦による豊富な挿絵でも知られています。その詳細に描かれた絵は、実際の写生に基づくもので、当時の風景や風俗を知る上で、大変貴重な資料となっています。ここで紹介する挿絵は、「金王八幡社」の図の左下の一部、神社の門前部分を拡大したものです。

神社の挿絵を描こうとする場合、社殿などの建造物や境内がメインとなりますから、その周辺のものに対して、さほど注意を払って描かないでしょう。

しかしここでは、周辺部分も簡略化することなく、丁寧に描き込まれているのがわかります。

例えば、右上の「表門」の前の橋は、今はありませんが、中世城館の濠跡といわれる水路にかかっていた橋です。また、左右に走る道（現在の八幡通り）の片側には、実際にここにあった渋谷東福寺門前の家並みが描かれています。一方、道の反対側（手前側）には、福岡藩黒田家の下屋敷がありましたが、ここでも、武家屋敷の大きな門が、道に面して描かれているのがわかります。

当時の渋谷は、江戸の外縁部に位置しており、江戸の中心部のように、錦絵などに描かれることは多くありませんでした。そのため、『江戸名所図会』の挿絵は、本文に書かれた記事とともに、かつての渋谷を知る貴重な資料となっています。

#### 【今後の展示予定】

##### 特別展「渋谷の富士講」

###### —富士への祈り—

開催中 平成22年3月22日（月・祝）まで

\*富士講の講社・山吉講の資料を中心に、渋谷にゆかりのある講社の資料を紹介しています。

##### 「渋谷現代短歌優秀作品展示」

平成22年4月1日（木）～4月18日（日）

\*第10回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

##### 企画展「渋谷のむかし写真展シリーズ」第10回

平成22年4月24日（土）～6月6日（日）

#### 白根記念

#### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) / 小中学生:50円(40円)

※( )内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.13

平成22年3月1日発行